

平成 24 年第 17 回

# 札幌市教育委員会会議録

※ 非公開に係る議案を除く

平成24年第17回教育委員会会議

1 日 時 平成24年9月19日（水） 13時30分～15時24分

2 場 所 S T V北2条ビル4階 教育委員会会議室

3 出席者

委員長	山 中 善 夫
委員	臼 井 博
委員	西 村 真 理
委員	池 田 光 司
委員	北 原 敬 文
教育次長	町 田 隆 敏
生涯学習部長	梅 津 康 弘
学校教育部長	金 山 正 彦
中等教育学校担当課長	西 川 智
中等教育学校担当係長	村 上 玄 光
指導担当部長	池 上 修 次
指導担当課長	檜 田 英 樹
指導担当係長	大 道 弘 孝
指導担当係長	村 元 秀 之
教育研修担当部長	大 友 裕 之
教職員課長	池 戸 和 俊
服務担当係長	八木野 久
総務課長	長谷川 雅 英
庶務係長	宮 地 宏 明
書 記	藤 間 雅 尚

4 傍聴者 3名

5 議 題

報告第1号 平成23年度札幌市学習実現状況調査及び平成24年度全国  
学力・学習状況調査の結果の概要について

議案第1号 札幌市立中等教育学校の校名案について

議案第2号 教育委員の辞職について

議案第3号 教職員に対する懲戒処分について

**【開 会】**

○山中委員長 それでは、これより、平成24年第17回教育委員会会議を開会いたします。

会議録の署名は、臼井委員と池田委員にお願いいたします。

本日、設楽委員から、所用により、会議を欠席するとの連絡がございました。

それから、本日の議案第2号及び議案第3号は、人事に関する事項でございますので、教育委員会会議規則第14条第2号の規定によって公開しないこととしたいと存じますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○山中委員長 それでは、本日の議案第2号及び議案第3号につきましては、公開しないことといたします。

## 【議 事】

### ◎報告第1号 平成23年度札幌市学習実現状況調査及び平成24年度全国学力・学習状況調査の結果の概要について

○山中委員長 それでは、報告第1号について、事務局からご説明をお願いいたします。

○指導担当部長 指導担当部長の池上でございます。

報告第1号 平成23年度札幌市学習実現状況調査及び平成24年度全国学力・学習状況調査の結果の概要がまとまりましたので、ご報告を申し上げます。

まず、お手元の資料の平成23年度札幌市学習実現状況調査結果の概要をごらんいただきたいと思っております。

札幌市独自の調査である本調査は、札幌市の教育課程の実施状況について、学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習状況を把握し、指導上の課題等を明らかにした上で、今後の教育課程の編成や指導の改善に資することを目的に、今年2月に実施したものです。

対象学年及び教科は、小学校5年生の社会、中学校2年生の社会と英語で、このほかに学習に関する意識調査をそれぞれ実施しております。

調査対象者は、対象学校及び学級を無作為で抽出し、各学年在籍児童生徒数の約7%に相当する小学校974名、中学校1,070名です。

資料の中での用語について説明いたします。

まず、設定通過率とは、各設問においてあらかじめ設定された、学年として期待される通過率（正答率）を、領域や観点などの項目ごとにくくって平均したものです。簡単に言えば、学年として到達が求められる数値と言いかえることができます。

札幌市の通過率は、各設問における本市児童生徒の通過率（正答率）を領域や観心の項目ごとにくくって平均したものでございます。また、文中に、有意な差という言葉が出てきますが、これは、設定通過率を設ける上で、集団ごとに許容されるプラスマイナス3ポイントの誤差の範囲を超える差をとらえています。

2ページをごらんください。

今回実施いたしました小学校社会、中学校社会、英語における課題と改善の方向をまとめております。

小学校5年生の社会について3ページをごらんください。

小学校社会については、教科全体で見ると、設定通過率が66.2%であるのに対して、札幌市の通過率は66.0%で、設定通過率とほぼ同程度となっております。基礎と応用で見ると、基礎、応用ともに、設定通過率とほぼ同程度となっ

ています。さらに、観点別で見ても、3観点とも設定通過率とほぼ同程度、また、領域別に見ても、3領域とも設定通過率とほぼ同程度となっております。

5ページをごらんください。

中学校社会についてですが、教科全体で見ると、設定通過率が59.1%であるのに対して、札幌市の通過率は63.1%であり、設定通過率を4.0ポイント有意に上回っております。基礎と応用で見ると、基礎、応用ともに、設定通過率を有意に上回っております。観点別ですと、社会的な思考・判断、観察・資料活用の技能・表現、社会的事象についての知識・理解の観点において設定通過率を有意に上回っております。領域別に見ますと、歴史・近世の日本において設定通過率を有意に上回っております。その他の領域においては、設定通過率とほぼ同程度となっております。

次に、中学校英語についてです。

7ページをごらんください。

英語については、教科全体で見ると、設定通過率が67.0%であるのに対して、札幌市の通過率は69.2%であり、設定通過率をやや上回っておりますが、有意な差ではなく、ほぼ同程度とすることができます。

基礎と応用で見ると、基礎、応用ともに、設定通過率とほぼ同程度となっております。観点別に見ますと、表現する力、言語や文化の知識・理解の観点において設定通過率を有意に上回っております。理解する力においては設定通過率とほぼ同程度となっております。領域別では、文法・表現・英作文の領域において設定通過率を有意に上回っており、その他の領域においては設定通過率とほぼ同程度となっております。

続きまして、もう一つの資料の平成24年度全国・学力学習状況調査の結果の概要についてご説明申し上げます。

8月8日水曜日、文部科学省から札幌市の調査結果のデータを受け取って以降、結果の概要を把握するため、データの分析を行ってまいりました。札幌市においては、過去4回、本調査の結果について、序列化や過度の競争につながるような数値を直接公表しておらず、今回も同様の扱いといたしました。

平成24年度全国・学力学習状況調査の結果の概要の1ページをごらんください。

ここには、調査の目的等が示されておりますが、若干、文言の変更はあるものの、これまでと大きな変更はございません。

今回、抽出調査となった今年度の学校数についてですが、小学校は44校、全体の21.7%、中学校は32校、32.7%となっております。

調査結果の公表項目についてですが、2ページをごらんください。

本調査における札幌市の調査結果の概要については、これまでと同様、本市の概要、今回の調査における課題、改善の方向の3点について示しております。

本市の概要については、平均正答率等の数値を直接用いず、各教科の領域ごとに本市の平均正答率と全国の平均正答率を比較し、プラスマイナス3%の幅で、上回っている、ほぼ同程度であるが、やや上回っているなど5段階で説明しております。

小学校国語について2ページをごらんください。

問題A、Bともに、全国平均とほぼ同程度ですが、Aの話すこと・聞くこと、書くこと、言語事項、Bの話すこと・聞くこと、読むこと、言語事項については、ほぼ同程度であるが、やや上回る状況でございます。その他は、ほぼ同程度またはほぼ同程度であるが、やや下回っているという結果となっております。

今回の調査における課題は、領域の設問等を分析し、今年度の全国平均との比較等において課題となる部分を示しております。

改善の方向は、課題を受け、改善すべき指導方法や学習活動を示しております。具体的には、ごらんとおりでございます。

平成22年度との比較については、右下の表に示しておりますが、総じて大きな違いはない状況ととらえております。

次に、小学校算数について3ページをごらんください。

問題Aでは、数量関係において全国平均を下回るという結果であり、その他の領域については全国平均とほぼ同程度であるが、やや下回るという結果です。問題Bにおいては、図形領域においてほぼ同程度であるが、やや上回るという結果であり、その他の領域については全国平均とほぼ同程度であるが、やや下回るという結果です。今回の調査における課題及び改善の方向はごらんとおりでございます。

平成22年度との比較については、右下の表に示しておりますが、全国を下回った領域が一つ減っている状況となっているものの、その他の領域については総じて大きな違いはない状況ととらえております。

次に、小学校理科について4ページをごらんください。

理科は、問題A、問題Bの区別はなく、主として知識に関する問題と、主として活用に関する問題を一体的に出題しております。

粒子の領域において全国平均とほぼ同程度であるが、やや上回るという結果であり、その他の領域については全国平均とほぼ同程度であるが、やや下回るという結果でございます。今回の調査における課題及び改善の方向はごらんとおりでございます。

次に、中学校国語について5ページをごらんください。

問題Aでは、読むことにおいて全国平均を上回るという結果であり、その他の領域・事項については全国平均とほぼ同程度であるが、やや上回るという結果でございます。問題Bでも、読むことにおいて全国平均を上回るようになっており、その他の領域は全国平均とほぼ同程度であるが、やや上回るという結果です。今回の調査における課題及び改善の方向はごらんとおりです。

平成22年度との比較については、右下の表に示しておりますが、問題Aにおいて、全国を上回っていた話すこと・聞くこと、書くことが、やや上回る結果となっております。問題A、問題Bともに読むことが全国を上回る結果となっております。

次に、中学校数学について6ページをごらんください。

問題Aの数と式、図形はほぼ同程度であるが、やや上回るという状況であります。他の領域は全国を上回る結果であり、問題Bにおいては、すべての領域で全国を上回るという結果となっております。今回の調査における課題及び改善の方向はごらんとおりでございます。

平成22年度との比較については、右下の表に示しておりますが、問題Aについては図形がほぼ同程度であるが、やや上回るとなっておりますが、その他の領域においては昨年同様となっております。問題Bにおいては、すべての領域で全国を上回る結果となっております。

次に、中学理科について7ページをごらんください。

理科は、小学校同様、問題A、問題Bの区別はなく、主として知識に関する問題と、主として活用に関する問題を一体的に出題しております。

物理的領域、化学的領域において全国平均を上回るという結果であり、その他の領域については全国平均とほぼ同程度であるが、やや上回るという結果でございます。今回の調査における課題及び改善の方向は、ごらんとおりでございます。

この調査の今後の主なスケジュールについてでございますが、札幌市の独自調査及び全国学力・学習状況調査の結果の概要は、ともに本日、この教育委員会会議が終わりましたら、すべての市立小・中学校に通知して情報を提供するとともに、報道機関各社に対しても情報提供する予定としております。

今年度も、札幌市の調査結果を、今後さらに詳細に分析し、具体的な指導方法の改善策などを実施報告書に取りまとめ、札幌市の独自調査は今のところは10月に、全国学力・学習状況調査については11月ごろを目途に学校に示していく、実際の指導に活用していく予定でございます。

以上で、ご報告を終わります。

○山中委員長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明につきまして、ご質問、ご意見がありましたらお願いいたします。

○西村委員 札幌市の独自調査の方ですけれども、経年比較が各項目ごとにあったのですが、説明がなかったかと思いました。大ざっぱにどうだったのか説明していただきたいのです。

○村元指導担当係長 札幌市の独自調査は、この経年比較ができるように、ほぼ同様の問題を使って実際に経年を比較しておりますので、このような形でグラフで実際に示しております。教科全体における設定通過率との差異は、平成20年度に比べて、小学校5年生社会科と中学校2年生社会科において、いずれもほぼ同程度となっています。また、中学校2年生英語における設定通過率との差異では、平成20年度に比べて3.4ポイント上回っています。

大まかにお伝えすると、このような形になります。

○西村委員 ということは、英語は上がっているけれども、ほかのものは大体同じだと。

○村元指導担当係長 同程度という形です。

○西村委員 わかりました。

○山中委員長 ほかにございませんか。

今回の調査における課題と改善の方向については、ごらんとおりということだったのですが、もう少し大ざっぱなところでも説明していただいた方がよろしいのではないかと思います。特に、今回の調査における課題、改善の方向と過去のこと、さっきの経年変化というほどのことではなくても、今年はどういう傾向があった、過去の調査に比べてもこういうところが問題ではなかった。だから、こういうふうには改善を考えていきたい、そういうような説明があった方がわかりやすいのです。

○村元指導担当係長 各設問ごとに、詳しい分析をして、どのような形で改善策を示すかというのは、全国学力・学習状況調査については11月の実施報告書に詳しく説明を載せたいと考えておりますが、簡単に、それぞれ今年度の課題についてと改善の方向についてお伝えいたします。

まず、全国学力・学習状況調査におきましては、本市の今年度の概要につい

ては、小学校国語は、読むこと、言語事項が、全国平均と比較して、これまでよりも若干上回っている状況になっています。ただ、実際に書くこと等については、そこに書かれておりますように、手紙の書き方等を実際に書く活動をより充実させることが必要であるということを、概要等についてうたっております。

また、小学校算数の部分では、今回、数量関係が全国平均に比べて下回っているとなっております。これは、実際に、掛け算、足し算、割り算等がまざった計算を、図と結びつけながら、実際に式を理解するという部分について課題となっており、これは、今までも同様の課題となっておりますので、そこを改善の方向に示しております。

理科については、今年度初めてですので、経年での課題はございませんが、それぞれの観察や実験のデータをもとに、それを分析したり説明することについて課題が見られるという形になっております。

中学校については、ほぼ全国を上回っている形になるのですが、今年度は、読むことについてが、これまでの全国平均に比べて上回っている形になっています。ただ、詳しい問題等を分析していきますと、無回答率について、いわゆる回答がないという問題については、やはり課題が見られるということを見出しておりますので、その中で、実際に小学校と同様に手紙を書くこと、文章を書くことの充実等を課題として、また改善の方向として示しております。

中学校数学については、B問題については全国平均をすべて上回っているとなっておりますが、証明の問題や数量の関係を式やグラフにあらわして特徴をとらえるという部分については、やはり、今後、指導を充実していくということをこの中で示しております。

中学校理科についても、小学校と同様、観察、実験をもとにした、その予想を立てたり、新たな計画を立てていくという部分について、改善の方向を示しております。

以上でございます。

○山中委員長　そうすると、例えば、国語などの関係では、読書運動をかなり精力的に進めてこられた成果が上がっているのかなという感じもするわけですが、そういう札幌市の教育と学力テストとの関係で、この数年間やった中で、こういう点は札幌市として力を入れてきてよかった。けれども、こういう点はまだまだ足りないねと、そのあたりを概括的にお話しただけませんか。

○村元指導担当係長　小学校、中学校ともに、国語は、読むことが全国平均と比べて高まっているということは結果に出ております。生徒質問紙、児童質問

紙の中で、読書に対して親しんでいる、読書をする時間等については、数字的には今後詳しく分析をして出しますが、実際に数値として上がっているというところが見られています。ですので、実際に読むこと、また今まで課題となっていた言語事項について改善が見られているというのは、実際に読書活動等の効果があらわれているのではないかと考えているところであります。

あと、詳しい部分については、今後、問題ごとに児童質問紙、生徒質問紙の結果を相互に分析いたしまして、今後の課題、成果を明らかにしたいと考えております。

○山中委員長 皆さんからいかがでしょうか。

○西村委員 統計のマジックというか、平均という言葉だと、例えば、成績の分布が、二つの山があったときでも平均はこれで、正規分布をしていても平均はここになるというマジックがあると思うのです。この札幌市の場合、分布ですけれども、例えば、二極化しているとか、正規分布に近いとか、成績の分布に関して何か特徴がありますか。

○村元指導担当係長 実際に、具体的にどのような分布になっているのかということは、資料として出てきておりませんので、平均正答率を全国と比較する形で分析することとなっております。

○西村委員 ということは、どういう分布になっているかはわからない状態でやっているということですか。

○村元指導担当係長 現状はそうっております。

○西村委員 本当はわかった方がいいのかなという気がするのですけれども、どうですか。例えば、二極化が起こっているかどうかわからないのですけれども、そういうようなことになったときと正規分布しているときとの対応は違うと思うのです。ですから、分布に関しても、どういう資料があればできるのかわからないのですが、調べてみる価値はあるのかなと思うのですけれども、どうでしょうか。

○山中委員長 この学力テストに限らず、日ごろ学校でやっているテスト、あるいは、札幌市独自でやっているものの関係で、今、西村委員が問題にされたような分布が、正規分布ではない二極状態のような分布になっている危険性と

か、そういう可能性があると思わせるような現状にあるのでしょうか。

そういうことがうかがわれるのだったら、その点はきちんとしておく必要があるかもしれません。それが、ほかのいろいろな調査で、ほとんどその心配がないというのだったら、そこまで調べる必要はないのかもしれません。その辺がちよっとわからないので、まず事実として、ある程度、状況をつかんでおられるのかということをお聞きしたいのです。

○村元指導担当係長 いわゆる上下の分布がはっきりしているという事実として、具体的な数値等は、今、こちらでは持っていません。ただ、全国学力・学習状況調査、独自調査ともに、知識に関する問題、活用に関する問題、また基礎に関する問題、応用に関する問題として、問題の種類を分けて実施しております。その中で、実際に平均正答率が大きな傾向として、例えば、知識に関する問題よりも活用に関する問題の方が、より平均正答率が高いという形になりますと、実際に知識に関する問題、いわゆる基礎的な問題について正答率が低いということが実際に分析できます。そうなりますと、実際の二極化、または子どもたちの学習の状況に大きく差が出ているということも十分考えられますので、その点については今後詳しく分析していく必要があるかなと考えております。

○山中委員長 現状では、兆候的なものはつかめないということだと思っております。そうだとすると、西村委員が言われたように、一度調べてみて、正規分布になっているか、なっていないかあたりを気にしたような分析をする必要があるのかもしれないという気がするのです。

○臼井委員 テクニカルなことですが、我々は、分布の散らばりを見るのに、標準偏差というものをやるわけです。ですから、要するに、平均点が65点というので、前と指向性が変わらなくても、標準偏差の値が大きければ、今年の方が散らばりが大きいということがわかるわけです。ですから、その散らばりの大きさでもって、もしかしたらもう一つ小さな山があるかもしれないということをお推測するわけです。

ただ、いわゆる標準偏差は、人数がすごく大きくなると、余りセンシティブでないのです。非常に小さくなってきます。人数が少ないと変動が大きくなります。そこで、例えば、ゼロ点から5点までの人が何人いた、6点から10点までが何人いたというヒストグラムを見ればそのところがわかるので、その辺の情報はどのぐらい開示されているのか、伺いたいのです。

○村元指導担当係長 現在、提供されているデータでは、それぞれ問題ごとの正答率、該当率が表になって出てきている状況であります。ですから、これまで同様、実際に事務局では、それぞれの問題の性質と難易度等を判断しながら、どういう問題がどれだけ無回答率が多いのか、正答率が多いのかという形で分析している状況ですので、具体的な、今、委員がおっしゃられたヒストグラムという形での情報提供にはなっていないということでございます。

○臼井委員 そうすると、今、問題なのは、学力の拡散問題です。要するに、個人差の散らばりが大きくなっているということが、今、議論になっているわけです。そうすると、積極的に特定の分布の情報についてもしっかりと出すべきだということを要望として伝えることをすべきでないかと思いますが、いかがでしょうか。

○村元指導担当係長 そのとおりだと思います。

○臼井委員 これは、札幌市独自のことでお伺いしたいのですが、英語のテストの経年比較を見ていますと、この平成23年度で非常に特徴的なのは、表現する力が、平成17年度と平成20年度では、全国と比べてかなり苦手な方だったのが、今度はプラス5点とすごく大きくなっています。

それからあとは、言語や文化の知識・理解は、むしろこれは特定の外国語というより、その外国の文化、あるいは、日本の文化を外国人にどう伝えるかというような面も含めて、これも平成23年度はぐっとよくなっています。これは、非常に重要なポイントを含んでいると思うのですが、このあたりの指導等の対応で想像できるものがあれば教えていただきたいのです。

○大道指導担当係長 英語については、今、臼井委員の方からお話があったとおり、平成20年度については、表現、あるいは、言語文化の知識・理解が課題であったわけですが、平成23年度に受検した生徒については、例えば小学校の外国語活動を経験してきた中で、異文化に触れる活動なんかを多く入れてきたとか、あるいは、ALTも増えている中で、ALTを交えた授業の中で、実際に子どもたちに表現をさせる、英語を使って自己表現をさせるという活動を各学校で多く取り入れられてきた、その結果としてあらわれているのではないかと推測しております。

○臼井委員 今のことで、中学2年生は、要するに小学校での外国語学習活動は、まだやっていない前の話ですね。そうすると、要するに、総合的な学習の

時間等でそのような国際理解にかかわっての外国語学習活動がある意味で前倒ししたような活動が増えてきたということも効いているのではないかという分析でしょうか。

○大道指導担当係長 今、お話があったとおり、総合的な学習の時間の中でも当然やっておりましたし、本市においては、移行期間の中から、すべての小学校において外国語活動を実施するように伝えておりました。今回、平成23年度については、2年生が受検しているわけですが、平成21年度の6年生のときにはすべての小学校で外国語活動をやってきたことになっております。

○臼井委員 わかりました。

○山中委員長 ほかにいかがでしょうか。

○池田委員 これは、札幌市の調査結果の概要の2ページです。

小学校の国語のところですがけれども、先ほど、委員長からも話がありましたように、札幌市の目指す読書の中の活用に関する問題Bが、特に書くことがやや下回っているというのは非常に方針の柱にしている中では少し期待外れかなと思います。期待外れかなというのは、あくまでも学力という学ぶ力という意味では、この活用に関する問題はとても大事ではないかと思う中で、やはりやや下回っていたということは、私はちょっと寂しい気がします。実際に、読書によって、数学あるいは理科の応用問題まで広がっていく基本中の基本のところを力を入れていながら、やや下回っているのは非常に残念なことだなという印象を私は受けたのです。

さらに、一番下には、記述式の問題における無回答が多くなっているということも含めて、先ほどのご質問とも関連しますけれども、読書の問題とか、私なりにももう一回、どんな問題だったのか精査してみたいと思いますが、どうい反省があつて、これからどうしていったらいいかについては、今、皆さんと同じように少し深掘りした議論ができるような資料づくりもしていただければありがたいと感じています。

特に、無回答が多かったというのは、何か特別あったのか、つくられて感じたことがもしありましたら、お教えいただければと思うのです。

○村元指導担当係長 前回の平成22年度調査に比べて、今年度の無回答が、より多くなっているという分析ではございません。これは、前回の平成22年度の部分についても、いずれの領域において記述式の問題における無回答が、全国

平均よりもやや多くなっているという課題は、引き続き今年度の調査でも出ているという認識です。

ただ、これについては、実際に出される問題の種類、また、問題が記述式であるかということも影響しておりますので、それぞれの問題ごとの詳しい分析を通して、ここに改善の方向は概要として示しておりますが、実際のより詳しい問題ごとに対してどのように対応していったらいいかということは、11月の実施報告書でしっかりと示していきたいと考えております。

○山中委員長 ほかにいかがでしょうか。

私の方からお伺いしますが、過去の教育委員会会議でも話題になったことですけれども、小学校の時代の調査結果では、どちらかというとな国平均よりちょっと下回っているという傾向が、これまでありますし、今回もそうですね。中学校になると、今回の調査、あるいは、過去も大体似たような傾向かと思いますが、全国平均とほぼ同程度、もしくは、それを上回ると。今回の場合は上回っているところが多いように思われるのですが、そのあたりが、どういう理由というか、どういうことがもとになって、そういう傾向になってあらわれているのかということも分析しているのか、分析しているとすれば、どういう理由なのか、もししていないとすれば、この学力調査の回答からはそこまでは分析できないものか、していないけれども、こういうことでやればこのあたりが分析できそうだということになるのか、そういうあたりを含めてお答えいただきたいのです。

○村元指導担当係長 小学校よりも中学校で調査結果がよくなっている決定的な要因は何であるかということ、具体的にしっかりとこれが原因であるということ、今、私たちの部分では特定できていないのが現状でございます。ただ、児童質問紙、生徒質問紙の中で、それぞれの学習に対する意欲の部分と、家庭学習で実際にどのくらい取り組んでいるかという部分については、小学校と中学校で若干差が見られております。ですから、そういうことを分析のデータに入れながら、実際に子どもが学習に関する環境、意欲等が小学校と中学校でどのように異なっているかは、分析できないものではないととらえております。今までの児童質問紙、生徒質問紙、それから今年度の児童質問紙、生徒質問紙等の調査結果をもとに、改めて小学校と中学校の差がどのようになっているのか、なぜこのような結果が出ているかの分析を進めることは、今後も続けていきたいと思っております。

○山中委員長 ぜひともお願いします。

全体としての課題と改善の方向を考えていく場合に、そういった生活上の問題と大きく絡むのでしようけれども、やはり、教育委員会としても、全体的な傾向とその分析は大事だと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○白井委員 今の委員長のご質問の件ですけれども、我々心理関係をやっている者からすると、このことを予測するためには、柔軟的な研究と言うのですが、小学校の子どもたちを中学校まで追跡しなければ、因果関係ははっきりできないと思ひます。例えば、よく遊ぶ子どもが、本当に後から体力を十分つけて、友達との間の社会性もつけて、中学校に行ってから有利になるという仮説をもし立てるのであれば、小学校のときの友達と過ごして遊ぶ時間とか、生活習慣、早寝早起き朝ご飯と言ひますけれども、そのような基本的な生活習慣が身につけている子ども、あるいは、友達とよく遊んだという子との差が中学校の伸びとどう関係するかのデータがなければ、これは言えないと思ひます。

そういう意味で、我々は、大規模でなくてもいいので、少ない規模でもいいので、それを小学校から追跡するようなデータがなければ、このあたりは、特に北海道は、委員長がおっしゃったように、非常に特異なパターンですね。小学校のときは、札幌などで言うと、全国の平均か、場合によっては下の方だけでも、中学校へ行くと、キャッチアップし、それ以上になっているということなので、ある面では非常におもしろいと思ひます。さっき言っただけのように、小学校のときに伸び伸びやっっていることが、かえって中学校になってからの伸びにつながると、僕はある面でそう思っているのです。このことを確かめるといふのは、正直、そう簡単なことではなくて、今のようないデータが必要なもので、そんなことも、すぐにといふわけにはいきませんが、ある意味で見通しを立ててやることも必要だと思ひました。

○山中委員長 変に誤解して、変に安心してもいけないと思ひし、今のお話のように、本当にきちんとした分析をしないと、正しい答えは出ないと思ひます。ただ、それを文科省がやっっているものに頼って分析するのではなくて、札幌市独自の学力調査とか、生活習慣調査もやっって、その中で本当に伸びているのか、伸びていないのかをつかんでいけるのであれば、それはそれでいいと思ひます。

それから、問題自体が経年分析に耐え得るような問題かということもあると思ひます。過去に、正答率が物すごく変動して、全国的にも去年の正答率と今年の正答率が全然違ふという問題が出ていたこともあったように思ひます。それでは、正直に言っって、正確なところはつかまえないのではないかという気もするのです。ですから、いろいろな面から分析しなければいけない

のでしょうけれども、それにしても、さっき申し上げたように、中学校になって伸びているような感じも見えるというのは、もしそうだとすれば一体何に力を入れたことがよかったのかということを引きちんとつかまえて、この点をさらに伸ばしていくというか、力を入れていく、足りなかったものは何か、ではそこに力を入れていくということが大事だろうという意味でお願いした次第です。ほかにございますか。

○池田委員 いただいた資料は、非常に重たいもので、かつ重要なものだと私は感じるのですけれども、その中で、再三出ていましたように、この全体の分析をある程度されてきた心象といいますか、なるほどこうだったのか、あるいは、こういうことだなど、いわゆる概要といいますか、総括等、携わった者たちの意見が入った全体像がつくられて、それをどういう形で全体をまたそこから分析するのを抽出していった具現化していくか、そういうような調査票になっていったらいいのではないかという気がしています。

今、個々の改善の方向でも十分ですけれども、全体像として、読書はここまで力を入れてきて、やはり、もうちょっと工夫が要るかなとか、そんなような全体的な概要があってもいいのではないかと思います。さっき、委員長がおっしゃいましたけれども、そのようなことがあってもいいと思いますので、検討していただきたいなと思います。

○山中委員長 特に、5年やりましたでしょう。国の施策とは言いながら、とにかく5年やってきました。中には悉皆調査、中には抽出調査、それぞれがありますけれども、そういったものを踏まえて、その5年間での概要、全体的な傾向、そういうことに対して札幌市としてどう考えていったらいいのか。学力テストだけがすべてではないわけですけれども、札幌市独自の調査との対比などもしながら、札幌市の教育として、この5年間、学力テスト関連で見えてきたものは何なのか、他方、独自調査との関係でどうだろうか、読書活動に力を入れてきたことは本当に正解だったとか、ここはまだまだ足りないとか、いろいろな分析があり得ると思うので、学力テストだけの問題ではないかもしれませんが、少なくとも、学力テストの結果をまとめて、札幌市としてはこう考えていくということを出していく以上は、今ご指摘があった概要というのは、経年変化的なものをとらえながら解析していただけないかというのではないかと思います。それが、今後プラスになっていくのではないかというのが私の指摘です。

○指導担当部長 今、委員長からお話があったことと、各委員の皆様からいた

だいたご意見を私なりに整理させていただきますと、この5年間続けてやってきた中で、いわゆる立てた課題が妥当であったか、あるいは、それに基づく改善の方向性、さらに授業の中で具体化していったことを検証してみて、実際にそれがどうだったのかという視点で整理していくことがますます必要かと思えますので、そういう観点から、この段階で一度、この後また、きめ細かな報告書というか、次の改善策を考える段階で、そういう要素も取り入れながら、次に向けた整理をしてみたいと思いました。

○山中委員長 よろしくお願いいたします。

ほかにいかがでしょうか。

要望などございますか。

よろしいですか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 それでは、報告第1号につきましては以上で終わらせていただきます。

◎議案第1号 札幌市立中等教育学校の校名案について

○山中委員長 次に、議案第1号に入りたいと思います。

それでは、よろしく申し上げます。

○学校教育部長 学校教育部長の金山でございます。

議案第1号 札幌市立中等教育学校の校名案について、私から説明をさせていただきます。

お配りしております札幌市立中等教育学校の校名案についてという資料をごらんいただきたいと思います。

提案する校名案については、1、校名案というところにあります市立札幌開成中等教育学校でございます。

校名案の検討に当たりましては、3に記載しておりますとおり、学識経験者、学校関係者、地域住民等で構成された校名検討委員会を平成24年6月14日に開催いたしまして、委員の皆様のご意見を伺いました。その結果をもとに、事務局において決定したものでございます。

この校名案を選定した理由についてですが、2、校名案の選定理由をごらんいただきたいと思います。

まず、基本構想において、「校名や校歌の継承を含め、改編対象校の伝統を踏まえつつ、新しい学校づくりを進めていくこと」とあることを念頭に置きまして、開成の名称を新設校でも使用することとしたものであります。

また、開成の語源となる開物成務という言葉につきましては、人々の英知を開発して世の中の事業を成就させることといったことを意味しており、学校教育におけるいわば不易の部分をあらわしていることから、新しい学校をつくる上でも支えとなるものと考えました。

次に、基本構想の育てたい生徒像に、「将来の札幌を支え国際社会で活躍する、知徳体のバランスのとれた自立した札幌人」の育成を掲げたことから、札幌の学校であることをあらわしました。

最後に、直近に開校した札幌市立高校の校名を、市立札幌大通高校にした経緯があることから、同様に札幌市の開成であることを明確にするため、市立札幌開成としたものでございます。

今後のスケジュールについてですが、4、今後のスケジュールにございますように、本日の審議により決定された校名案を、平成25年の第1回定例市議会に条例案として提出し、学校設置条例の改正を行う予定でございます。

なお、本日、校名案を決定いただいた後、条例改正までの間は、校名案の前に（仮称）をつけて名称を使用したいと考えております。

私からの説明は以上でございます。

ご審議のほどを、よろしく願いいたします。

○山中委員長 ありがとうございます。

ご質問、ご意見はございますか。

○臼井委員 この校名については全く異議はないのですが、参考までに伺いたいのですけれども、審議のプロセスで、開成以外に何か候補として出たものがあったかどうかを教えてください。

○学校教育部長 一応、候補に上がったものが2点ございまして、一つは、札幌市立開成中等教育学校ということで、札幌と市立が入れかわっています。

二つ目には、清新開成中等教育学校というご意見もございました。

○山中委員長 「セイシン」はどんな字ですか。

○学校教育部長 「セイシン」というのは、開成高校の校章の由来に、清新闊達の気風を養っていきたいという言葉があります。

○山中委員長 清い新たですか。

○学校教育部長 「セイシン」というのは、清く新しいです。

という意見がございましたけれども、最終的には、札幌市立開成中等教育学校につきましては、小・中学校との区別が明確にならないのではないかという観点、それから、清新開成中等教育学校につきましては、開成と別の言葉が入るということで意味が煩雑になり、小学生が入学してくるに当たって、校名としてはわかりにくいのではないかという観点から、ふさわしくないのではないかというご意見がございました。

○臼井委員 わかりました。

○山中委員長 ほかにございせんか。

○池田委員 今後起こり得る第2、第3の中高一貫教育のあり方の中で、中等教育学校を統一するというところの議論は何か出てまいりましたか。

○学校教育部長 統一するというのは。

○池田委員 例えば、また何年かして、こういう中高一貫の場面が発生したときに、札幌市としては中等教育学校ということに統一していくのか、今それを考える必要はないということなのか、今のところはいかがでしょうか。

○学校教育部長 その会議の中での議論では、今後のことについてまでの言及はありませんでした。あくまでも、中学校と高校が一体になっている中等教育学校ですので、それは大前提としてあると思うのですが、その前段の部分について、今回、市立札幌開成ということでまとまったわけですが、その後のことについての言及はございませんでした。

○北原委員 池田委員がおっしゃっているのは、いろいろな形の中高一貫教育校があるだろうけれども、中等教育学校と定めたことについて将来的な展望をお持ちかということですか。

○池田委員 そうです。

○北原委員 開成を、併設型にするのか、一体型にするのかということで議論してきて、中学校部分と高校部分の6年間を通して全部ずっと続く形をとるということを議論として定めてきたわけですから、この形が、併設型ではなくて、いわゆる中等教育学校という形式になります。そのことを既に定めていましたので、ここで中等教育学校という名称に決めました。

今後、もし中高一貫教育を札幌市でさまざまな形で展開すべきではないかという議論が起こってきたとしても、そのときに併設型を新たに試みた方がいいとか、やはり中等教育学校の形式で進めていった方がいいとかいろいろな議論はあり得るでしょうから、それは、そのときに判断せざるを得ないでしょうけれども、今、この形式の中では中等教育学校の形で進めていくということです。

○山中委員長 併設型になると、名前は中等教育学校ではない別の形が必要だということですか。

○学校教育部長 中学校・高等学校です。

○山中委員長 ところが、一体型になると、中等教育学校というものが、これは法律上の名称ですか。

○学校教育部長 法律上に中等教育学校がございます。

○中等教育学校担当課長 法律上の学校種でございます。

○山中委員長 そこは、この形でいく限りは、この中等教育学校は変えられないというか、これを採用せざるを得ない、その前の部分の市立札幌開成をどうするかというのは、今回考えているシステムでもどのようにでもなるけれども、下の方の中等教育学校というところは、これでいくしかないのだということですね。

法律上の呼称であればしょうがないですが、何となく、中等教育学校というものが、高等部を含む名称として一般にぴんとこないというところがあって、池田委員がおっしゃったのだと思います。

○池田委員 外から見ると、中等というものに違和感があります。中等はどういう意味なのかということです。

○北原委員 もともと中学校、高校が中等教育なのです。高校は、後期中等教育です。

○臼井委員 両方の混乱がありますね。高校だから、高等教育だと思いますけれども、法律的には中等学校ですね。

○北原委員 中等学校なのに高等学校という名称です。

○池田委員 中等教育を受けたとか、昔の人たちが言いますよね。

○山中委員長 昔の旧制中学と旧制高校というのは全く違うのです。文部行政上はどうなっているのですか。

○北原委員 ちょっと調べなければわかりません。

いずれにしろ、小学校が初等教育で、中・高校が中等教育、そのトータルで施す学校だから中等教育学校という名称になってしまっています。誤解はあるかもしれないけれども、とりあえずは、これでいかざるを得ないと考えています。

○山中委員長 何となく違和感がありますね。

○池田委員 中程度、高校程度、小程度みたいな印象なのです。一般の人たち

から見て、ちょっと違和感がないかなと思ったのです。

○山中委員長 それはおっしゃるとおりだけれども、法律を変えなければ、どうしようもないです。

○池田委員 こういう議論がありましたと、文科省に言っておいてください。

○山中委員長 ほかにいかがですか。

○池田委員 あとは、歴史を踏まえて、立派な、いい結論をされたのではないかという感じがします。

○山中委員長 これは、一般には意見は聞かなかったのですね。

○学校教育部長 あくまでも、検討委員会だけでございます。

○山中委員長 なぜ、一般の意見は聞かなかったのですか。パブコメとかをしなかったのですか。

○学校教育部長 一応、基本構想の中でベースをうたっていますので、それをもとにということではございました。

○北原委員 基本構想については、市民意見をいただきました。

○山中委員長 ほかにございますか。

○西村委員 もとの名称が北海道札幌開成高等学校で、北海道という言葉が入っていたと思うのですが、大通高校もそうですが、北海道という言葉が入っていないのです。これに対しては、何か意見がありましたか。

○学校教育部長 検討委員会の中では、特にはございませんでした。

○山中委員長 もとの市立高校は……。

○西村委員 みんな北海道が入っているのです。

○臼井委員 旭丘も北海道が入っているのですか。

○**学校教育部長** はい。

○**山中委員長** 札幌というのは大通高校だけですか。

○**学校教育部長** 大通高校をつくる時に、この呼称になっております。

○**山中委員長** これは、札幌市立の場合に、北海道をつけなければならないという決まりはないですね。

○**中等教育学校担当課長** もともと、道立も市立も区分がなく公立という考えだったので、統一的に北海道札幌〇〇高等学校という呼称を使いましょうという暗黙のルールです。

○**指導担当部長** 地方分権一括法の制定の後に、そういう縛りを道が外したということで、自由に名前をつけられるようになったと聞いております。

○**山中委員長** むしろ、何となく札幌市立だから、札幌とつく方がいいのではないかという感じがします。

○**臼井委員** 市立高校でも北海道がついていたのですね。

○**山中委員長** 札幌がついていたような気がしていたけれども、違うのですね。ほかにございますか。

○**池田委員** そういう議論ではなくて、最初に思ったのは、札幌を売り出していくという意味では、札幌市立と札幌が前にあった方がいいかなと、これを最初に見たときに感じました。

○**北原委員** これは、大通高校のときもそうだったのですけれども、もしも札幌市立開成中等教育学校とすると、札幌市立は省略されることが多いのです。そうすると、ただ、開成中等教育学校、大通高校と。例えば、札幌市立という頭が省略されることを考えると、市立を先にしてしまえば札幌開成が名称ということで、とにかく札幌を外したくないという逆に強い思いを持ったときに、市立札幌という形にひっくり返した方が確実に札幌をつけてもらえるのです。

○山中委員長 むしろ、市立が要らないのではないかという感じもします。

○北原委員 ただ、市立であることを……。

○西村委員 私立の「シリツ」があるのです。

○山中委員長 それはわかります。ただ、例えば、大通小学校というときに、正式名称は札幌市立大通小学校ですか、単純に大通小学校ですか。

○北原委員 いえ、札幌市立大通小学校です。

○山中委員長 それが正式名称で、どこかに公的な書類を出すようなときに、必ず札幌市立を入れるということになっているのですか。

○北原委員 公式の書類は、札幌市立が必ずつきます。

だから、中学校から出す願書なども、必ず、さっき言ったように、北海道札幌開成高等学校です。

○山中委員長 そうすると、例えば今の旭丘だったら、札幌市立北海道旭丘高等学校ですか。

○北原委員 それはつかないです。高校の場合は、札幌市立は正式名称についていないのです。

○学校教育部長 北海道札幌旭丘高等学校です。

○臼井委員 道立か市立かわからないですね。

○学校教育部長 はい。

○山中委員長 それもおかしいですね。

○北原委員 逆に、市立であることをはっきりさせるために、市立を頭につけますよと。しかも、札幌を省略させないために、札幌を後ろに持ってきましたということですよ。

○西村委員 有名な私立の開成がありますが、よく私も、開成出身というのと、どうして女の人なのかと言われたことがあるのです。あそこは男子校だったのでね。

その意味でも、札幌開成と言われた方が、ただ開成と言われるよりはいいと思います。しかも、私立でなくて、札幌の市立高校であるということがわかるような名称がいいかと思います。

○山中委員長 通常は、大体、市立をとってしまおうでしょう。

○北原委員 そうですね。

○山中委員長 逗子開成という高校があるけれども、あれはたしか神奈川県立だと思うのです。

○北原委員 省略されることを念頭に置きながら、なおかつ残るものが札幌開成だと。

○山中委員長 ルールとして統一していくということではないのですね。

○北原委員 そうではないです。

○山中委員長 統一しなければ変だろうという気もするのです。

○北原委員 今からほかの市立高校をこの形式に全部変えていくとなると、抵抗感も大きいです。

○池田委員 あとは、こういう場合は、時代なので、英語でもどう表現するのかというところまで考えなければいけないと思います。次のステップだと思いますけれども、本当は英語表現で印象のいい言葉も加味しながら名前をつけていたりする場合も最近は多いので、今後は、そんなことも意識していただければありがたいと思います。

○山中委員長 英語表示などをする場合に、これも教育委員会の方で決める形になるのですか。

○中等教育学校担当係長 国際部で統一的な表記を定めています。

○山中委員長　そういうときには、逆に要望しておいた方がいいかもしれませんね。そうしないと、知らない間に決められて、それで外国に出す文書に出ていくことがありますね。

ほかにございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長　今、池田委員が言われたことについて、ここで決められることではなさそうですが、将来的にそういう表記を考えて提言していった方がいいという場合もあるかと思えます。

特になければ、議案第1号につきましては、提案のとおり、校名は、市立札幌開成中等教育学校とするということに決定いたします。

それでは、次の議案第2号に入るのですが、以下の議案につきましては公開しない議案となりますので、傍聴者の方はご退席をお願いいたします。

**以下 非公開**